

特集 ライティング指導を考える

ライティング指導の実践①

CopyingからGuided Writingまでのプロセス

津田 雅子

(練馬区立豊玉中学校)

1. はじめに

練馬区の平成18年度学力調査による研究報告によると、「聞くこと」「読むこと」の各学校の正答率は8割、9割の好成績であるが、「書くこと」においては、一部を除き、8割以下、中には、4割台という結果が出ている。低い正答率の問題は、単語の並べ替えによる英作文(Doesを使った疑問文)や条件英作文(Whatを使った疑問文、Let'sを使った文)である。自由英作文(自己紹介)については、7割以上の正答率があり、心配していたほどの悪い結果でないように思われる。しかし、他の技能と比較すると改善されるべき状況にあることは明白である。書く力をつけるためにはどんな手だてが必要になってくるであろうか。これまでの筆者の実践を通して有効であったと思われる指導例とその考え方を紹介したい。

2. 「書くこと」の分野

いささか古い文献になるかもしれないが、Rivers & Temperly (1978) は、「書くこと」の分野を以下の4つの項目に分類している。

I Writing down

II Writing in the language

III Production

IV Expressive writing or composition

Iは書くための規則を学ぶために、すで書いてあるものを写すこと、また、読んだり、聞いたりしたものを、文字を通して再現すること。IIは構文の要素や語いを多様な方法で操作、展開、変形、言い換えを行うこと。IIIは生徒の知識の範囲内で書かせるguided writingで、既習の言語材料を使って、

モデル文などを参考にして文章を書くこと。また、IVは実際の目的のために創作的に文章を書くことであると説明している。

3. 基本的な「書くこと」の指導

(1) 書き写しをする

中学校においてもIVのwritingを目指していくべきだと考えるが、まずは、Iにある「認知・書き写し」を軽んずることなく、しっかりと指導することを忘れてはならない。

練馬区では小学校において、各学年で最低でも5時間程度の英語活動を実施している学校もある。数年前と比較すると、入学当初からあいさつや数字、簡単な自己紹介などは多くの生徒が理解し、表現できるようになってきている。また最近では、アルファベットが書ける生徒の数も増えている。

しかし、そうした状況においても基礎をしっかりと定着させることを軽んじてはならない。ここでいねいな指導を繰り返さなければ、多くの英語嫌いをつくることになるだろう。私は、最初の書き写しにおいてつまづいた生徒が3年間悩み続ける状況に直面したことがある。自分の指導のまずさがそういう状況をつくったという思いから、以降、この時期は特にしっかりと取り組むようにしている。

中学校1年生における「書くこと」は、copying(書き写し)から始まる。どの先生も使っておられると思うが、まずはペンマンシップを使つての書き写しをさせる。ライティング指導の初期段階では、多くのケアレスミスが見られるのが以下の点だ。

●アルファベットの書き写し

- ・bとd, pとqの区別
- ・活字体とブロック体の区別(a-α, g-g)

- ・大文字と小文字の違い
- ・4 線枠内での字の大きさ
- 文の書き写し
- ・文頭の大文字
- ・文尾のピリオド、クエスチョン・マークの脱落
- ・単語間のスペース

そこで、書き写し作業はていねいにやりませ、多くの練習量を与えたい。書き写しは生徒にとっては単調になりがちで、あまりおもしろい作業ではないので、意欲的に取り組むことができるような工夫が必要だろう。例えば、「達成度カード」をつくって、与えられた課題が終了したらスタンプを押してあげるなどである。また、単なる書き写しに終わらず、最終的には自己表現をさせる練習に導いていきたい。自分の名前、家族の名前、友だちの名前等を書きながら生徒は大文字、小文字を併用して名前を表現することができるようになる。また、自分の住んでいる町、学校の名前、担任の先生の名前など、単語表記だけでも身の回りの事柄を表現できる楽しさを教えることは可能である。

(2) 文の書き方を学ぶ

書き写しの前には当然、英語の文の成り立ちについて生徒に認知させなければならない。日本語の文との違いをしっかりと理解することは中学1年生には難しい。国語の時間にはまだ、主語、述語、動詞、形容詞、副詞などの文構成要素を学習していないからである。文法用語はこの段階であまり使いたくないが、「～は」が主語、「～です」「～が好きだ」などが動詞、物の性質や状態を表しているのが形容詞、また、動作の状態を表すことばが副詞くらいの説明は必要だろう。

そして、説明した事柄を定着させるために、練習問題をしっかりとやりたい。そのために、ワークブックとノートを活用したい。最近は何の会社のワークブックもよくできていて、簡単な問題から難易度の高いものへと配列され、展開、変形、言い換えなどの練習ができるようになっている。ワークブックは授業のまとめとして活用できるとよい。その日学習した target sentence が頭に残るように、その場で確認し、間違ったものはノートで何度も練習させる。

さらに、家庭学習として、ノートづくりをやらせ

る。生徒はレッスンのセクションごとに見開きで本文の書き写しとその意味、単語の意味調べ、target sentence の説明、余ったスペースに単語、target sentence の練習をする。セクションごとにしっかりと2ページを埋め尽くされている場合には“Good Try”のスタンプを押してあげる。そうすれば生徒は意欲をもって取り組むようになる。

上記のような地道な取り組みを通して、ライティングの基礎づくりができると考えている。

4. 「まとまりのある文章」を書く指導

先に挙げた Rivers & Temperly の「書くこと」の分野にあるⅢは guided writing である。NEW CROWN では、“DO IT WRITE”がその guided writing にあたる。身近なトピックを取り上げ、既習の言語材料を使って、まとまりのある文章を書く活動である。ここでは、「何を書くか」、「どのように書くか」を明確にさせながら、書くことに取り組ませる。まず STEP 1 で3枚の絵が与えられる。3枚の絵は文章の3つの要点を示すものだ。絵の要点を見ながら示されたモデル文を読む。これらの絵と、モデル文によって「何を書くか」「どのように書くか」を理解することができる。STEP 2 では、WORD BANK を活用しながら、3つの要点に関わる自己表現をする。

以下、「日本文化」をテーマにまとまりのある文章を書く活動の手順について紹介したい。(NEW CROWN Book3) モデル文は Show & Tell のスピーチ形式の文章である。(独自のワークシートを使つての指導)

- (1) 教師が生徒の前で実際に Show & Tell を行う。
- (2) 生徒の理解度をチェックする。
- (3) ワークシートにあるモデル文を読ませる。
- (4) ペアでブレインストーミングを行わせる。

(STEP 1)

- ・「身近な日本文化とはどんなもの？」
- ・「その特徴は？」
- ・「さらに何を伝えたい？」

- (5) ワークシートを書かせる。(STEP 2)

ブレインストーミングで明確になった3つの要素について書く。

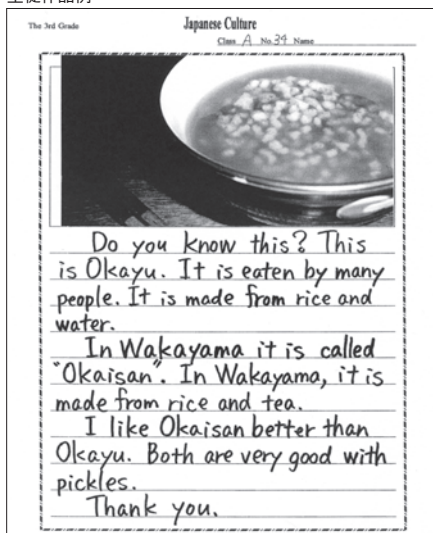
- (6) 文章の核となる3つの文ができたら、モデル文を参考にしてまとまりのある文章を書かせる。(STEP 3)
- (7) 書いたものをペアで読み合い、ケアレスミスや文章表現についてアドバイスをする。
- (8) グループで再度読み合い、再度ケアレスミスや文章表現についてアドバイスをする。
- (9) 教師に提出する。

教師は添削を行うが、ケアレスミス、語順に関わるミス、文法上のミス等、アンダーライン、矢印、()等の記号を使って生徒にフィードバックする。ALTのお手伝いがあるとよい。

- (10) 生徒は返却されたワークシートを見ながら清書する。
- (11) 書いた原稿を見ないで Show & Tell の発表ができるように練習する。

標準配当時間は1時間となっているが、(1)～(11)までをていねいに行くと3時間くらいかかるだろう。提出された作品の添削は全部を正確に訂正しようと思うと教師側も膨大な時間が必要になる。意味とコミュニケーションに影響を与えないような間違いについては“Learning steps”と捉え、結果主義に陥らないようにしたいものである。こうしたまとまりのある文章を継続的に、また、発展的に書くことを通して、生徒の書く力は一步一步前進する。

生徒作品例



5. 何度も書く機会を与える

各教科書には、NEW CROWNにある“DO IT WRITE”の形式のライティング活動が各学年2～3ある。まとまりのある文章のライティング指導は時間がかかることから、あまり数多く設定できないのであろう。しかし、書く力をつけるには書く量、すなわち書く回数を増やすことが必要だ。そこで、教科書以外にもチャンスをつくって書く課題を与えていきたい。4月にはどの学年でも自己紹介文は必ず書かせたい。夏休みの課題ならば日記文、ALTへのグリーティング・カードなど。また、すでに書いたトピックを再度定期考査に出題することもできる。数多くの書く機会を持つことによって、ケアレスミスがなくなり、まとまりのある文章を苦にせず書くようになるはずだ。

生徒が書いた作品やワークシートは、ポートフォリオとしてファイルしておくといよい。以前に書いた文章を振り返りながら、学習を進めることができるし、自分の書く力の成長を見ることによって、さらに書く意欲を高めることができるからである。

6. おわりに

「書くこと」の指導に取り組んでいくことは、ある意味では大変なことである。なぜなら指導者側にも生徒側にも根気強さが要求されるからだ。しかし、あまり、大変だと思っていると何から始めたらよいかわからなくなることもある。「とにかくやってみよう」と思って取り組んでいくことが大切だと思う。生徒が興味を持っているトピックを取り上げ、日々の学習の中に少しずつ取り入れていくことが大事だと考える。